

漢字の宝石

千葉県野田市立南部小学校教諭

卯月 啓子



1 漢字一字で広がる世界

平成十五年二月二十五日に「漢字の宝石」という学習をしました。子どもたち（平成十四年度五年一組男子18人女子16人）に、漢字一字ですてきな世界を作らせたいと思いました。一枚の色紙（24cm×27cm）に、自分の好きな漢字一字を選んで、墨で書くのです。早い子で二時間、遅くても三時間ですてきな作品ができあがりました。

2 別れていく子どもたちに

来年度新設校が開校するので、約三分の一の子とは今年でお別れになります。そんなこともあって、共に学んだ五年生の修了記念としても、自分から自分に贈る記念の色紙を作らせたいと思いました。

わたしは、ある何回目かの転勤の折に、すてきな色紙

とをうれしく思い、夏のようにいつも明るく生きていきたい。」と書きました。柳原由依さんは

「友」「友―たいへんな時にはげましてくれろ」。植竹真弓さんは

「海」。「海のような大きい心を持ちたい」。秋谷利奈さんは「必」。

「くじけそうな時必ずできると思えるように。」と願いを込めました。中沢聡史

さんは、喘息の持病もあって細い体で小さいのですが、毎日元気に登校しています。その彼は「健」と書き、「体がじょうぶ。すこやか。なのでぼくもいつも健康でいたい。」と書いてありました。大浦早也香さんは「笑」。「笑っていると周りの人に不安を与えないし、自分も元気が出てくる。だから、私はいつも笑っていたい」。斉藤千明さ

んは、一月に一家でブラジルから来ました。日本語はほとんどできませんが、彼女は友達のを借りて、「雪」と書きました。「雪―ブラジルからきてはじめて雪を見た。きれいだっただ。何もかも初めての彼女にとって、雪は特に印象が強かったものと思われま



をもらいました。中央に「究」という文字が折り紙の上に墨で書かれ、その文字を囲むように折り紙の鶴が何羽

かセンスよく配置されていました。贈ってくれた先生は、「いつも本を読んでいたり原稿を書いたりしていましたね。これからもますます研究をしてほしいです。研究を究めてほしいという意味も込めてこの漢字を選びました。」ということばをくださいました。その後、わたしはこの色紙を見るたびに、励まされたり勇気づけられたりしました。

3 好きな漢字を選ぶ

子どもたちに「究」の色紙を見せ、わたしのエピソードを話しました。静かに聞き入ってくれました。子どもたちは辞典を使うなどして、「夢」「心」「力」「輝」「気」「絵」「勇」「厳」等々、自分を励まし力づけ、慰める漢字を選びました。折り紙の上に墨で文字を書き、色紙に張りしました。余白には飾りを張り、絵をかきました。そうすると、漢字一字が本当の宝石のように美しく輝いて見えました。

4 子どもたちがその漢字を選んだ理由

色紙の裏には、「輝いて生きていたい。」「自分に厳しく人にやさしく。」等々、その子がその漢字を選んだ理由を書きました。篠崎彩夏さんは、名前の漢字から「夏」を選び、その説明に、「夏に生まれ自分の名前に夏がつくこ

5 多く迷う

二文字で自分の気持ちを表したのは、吉村光司さんです。「多迷」。意味がわからず問い直すと、「多く迷う」と答えました。ほかの子たちとは明らかに異質なのでとまどいました。理由を問うと、「すぐ、いろいろなことを決めちゃうんじゃないかと、いろいろ迷ったほうが正しい答えが見つかると思うから。」と話してくれました。この子の堅実で着実な考え方に感じ入りました。ともすれば、結論を急ぎ、早く判断することは要求していた自分を反省させられました。色紙の裏には詩が書き付けてありました。「迷え よく迷え／迷えば先に／光あり」あまりにすてきな詩に声も出ませんでした。ちなみに、この「光」は、彼の名前「光司」からとったということでした。

6 卯月啓子先生へ

早く作り終えた子どもたちが何人か集まって相談していました。「なんなの。」と聞くと、「ひみつ。」と答えました。何か楽しそうにしているの、まあいいかとそっとしておきました。すると翌日、「春」と書いた色紙をくれました。裏には、皆のお別れにあたってのひと言が書いてありました。「先生を漢字一字で表したら『春』になったんだよ。」

何よりのプレゼントをもらいました。